

地域性を問う

中 田 重 厚

1

ここでは、地域性とは何かを考え、地域をみる若干の分析視角を呈示してみたい。「地域性」とは、一見極めて不確かで曖昧な言葉であり、そのままでは、分析的用語として使えそうもない。しかし、この一般によく用いられている「地域性」という用語を手がかりとして、概念の精緻化をはかることが可能であろう。

「地域性」概念の明確化のために、まず最初に問われるべきことは、地域性ということがいまい／＼何故／＼問題になっているかということである。今日の問題状況（現実）の把握こそが概念化Ⅱ理論化に他ならず、決してその逆ではありえないからである。すなわち、ここでは、説明概念としての「地域性」その他の概念を、現実在先立って設定しようと思図するものではない。なぜなら、現実在先立って概念化Ⅱ理論化をはかることは概念の道具化に他ならないからである。

2

「地域性」が今日問われる問題状況を考えると、つぎの二つの局面が浮かび上がってくる。一つは、地域社会をとりまく自然環境の悪化、すなわち工業化の進展および工業化と並行して進められる都市化による様々な公害問題で

ある。これについてははや多くの説明を要しないであらう。都市・農村いずれの地域を問わず環境破壊が進み、衣・食・住生活その他日常生活の諸領域に深刻な影響を与えてきていることは自明であるからである。第二は、工業優先政策の結果、農林漁業などいわゆる第一次産業の衰退と地域生活の破壊を招来したことである。モノカルチャー化は、その典型であり、経済成長の跛行的発展の結果にすぎない。すなわち、破壊的發展である。さらに、国際分業論に立脚する貿易自由化の進展と地域間賃金格差は地域に根ざした伝統的手工業や農林漁業を衰退させた。

この二つの局面は、資本制生産体制下での最大限利潤追求型の工業優先政策に帰因するものであり、相互に関連をもっているが、異なつた問題状況であり、異なつた問題領域を構成する。すなわち、第一の局面は、利潤追求型の工業開発、地域開発の結果、自然系が破壊され、自然のメカニズムを通じて人間および人間集団の生存を脅かしてくるという問題状況である。¹⁾自然環境や資源は、生産過程においては労働対象となり、人間の生存、労働力の再生産に必要な物資を供給するものである。したがって、第一の局面は生産力的問題領域を構成する。これに対して、第二の局面は、生産関係の問題領域を構成する。

ここで、後で展開する論述のために、第二の局面の問題状況について言及しておきたい。わが国の戦後の工業発展は中央集権的な行政システムを一層強化する方向で進められてきたが、明治以降の西欧追随型の近代化過程が戦後の高度成長を通じて終焉し、中央の指導性にかげりがみられてくる。地域社会の変質と荒廃、地域内の共同体的な連帯は失われ、人々の接触は市場機構を通しての接触に変わっていく。生産体制が官庁の指導により効果を上げた地域においては、全国市場に見合ったモノカルチャー化された生産であるから、官僚統制的な指導体制が今後とも続いていくかにみえる。しかし、地域開発の破綻から、外部資本に収奪されやがて見捨てられていった地域や、当初から開発目標にもならず過疎化していった地域が、今日の状況の下で、独自の定住の条件を様々に模索しはじめている。例えば、昨年十一月に発刊された「地域への視角」(清成忠男、中村秀一郎編、日本経済評論社刊)の中では、各地で

の地域づくりの事例が紹介されている。例えば昨年三月に開かれた兵庫県における「住まいを考える県民会議」がその一例であり、これは、住居の問題を開発屋的発想によらず住民側からの発想によって考えていくものである。また山形県では、県営の発電所をつくった電力の売上金を山梨県のように高価な絵画のコレクションをやるのではなく、地域振興に役立てる研究会を五三年度からつけて、地域産業振興にとりくんでいるという。この他にも多様な地域づくりの実例が報告されている。地域社会の行政機関や住民サイドからする地域づくりが盛んになったことは、これまでの外部依存型もしくは中央行政依存型の地域開発の行きづまりと、内発的地域振興の必要性が客観的に認められ、また地域住民側で主観的にも意識化されてきたことを物語っている。五二年十一月に閣議決定された国土庁の第三回全国総合開発計画（三全総）は、中央政府の指導の下にこれまで進められてきた地域開発の破綻と低迷、全国各地で展開されてきた内発的發展や地域づくりのプランを追認し、再企画化したものである。三全総の目玉商品である定住圏構想では、地域住民一人一人の内発性を尊重し、分権的社会を容認せざるを得ないかのようであるが、中央行政管理体制に依存する形の内発性などというものはそもそも成立ちえないから、定住圏構想それ自体が矛盾の産物である。定住圏構想のねらいは、昭和三七年の全総以来おし進められてきた拠点開発方式の焼き直しであり、大都市に集中しすぎた人口の分散と新たな工業化の拠点をつくりだしていくことをめざすものに他ならない。定住圏として指定される河川の流域地域は、分散した都市人口や新たに興される工業のために、その土地や労働力、資源が供されるのであり、地方が中央によって収奪、搾取されるシステムを一層おし進めるものである。しかもこの構造の中では、地方は周辺資本主義化、つまり跛行的發展を余儀なくされる。⁽³⁾旧来産業である農業においては、商品価値の高いものの生産が推進され、その結果、家族やムラの共同体的秩序が弛緩し、農民の精神的安定を失わせる。資本制的生産関係は、市場メカニズムを通じて貫徹する。生産体制は完全に全国市場に見合った形で整備されるから、各農家の営農への意欲は失われる。⁽⁴⁾

地域性とは、地域の個性であり、また風土性でもある。地域性のこのような規定は、単なる思いつきではなく、前述の今日の問題状況を踏まえたものである。大都市圏以外の地域は生産、生活のあらゆる活動領域が大都市圏に依存従属する形で営まれてきており、地域に根ざした生活様式や文化が失われ、大都市の生活様式、文化のミニチュア版となる仕組みである。生活様式や文化の没個性化は、生産様式の没個性化に帰因している。生産体制のモノカルチャー化は生活全般のノン・カルチャー化に通ずる。都市の文化はマルチ・カルチャーであるが、雑文化であり、生産領域と生活領域の分離が支配的である故に固有の文化を生みだす構造を持っていない。したがって、地方の生産と生活の解体が進むと、全国的なレベルで、生活、文化の解体が進行することになる。地域の個性とは歴史的に形成されたものである。

地域性は風土性であると規定することにはいささか説明が必要かも知れない。風土というものが、まだ一般には地質や植生、気候など自然そのものと意識されることが多いからである。しかし、地域の自然は自然そのものであるよりも人間の歴史的営為が込められた自然であるから、地域の生活そのものの表出と考えてよい。すなわち、風土は地域の個性、地域性を表わしている。

社会生活の構造は、物資の生産活動や労働の再生産活動である衣・食・住生活、養育、教育その他サーヴィスなどから成るが、人間の生活は直接にも間接にも自然と接触しており、自然の存在を無視して生活構造を語ることとは無意味である。社会生活の構造と件には、人口、自然環境・資源とこの両者を媒介する技術とがあり、この三つは、ただあるがままの状態では社会生活に何ら影響を及ぼさない。それらは、労働過程の中で、それぞれ労働力、労働対象、労働手段となり、生産力の三つのモメントを構成する。人口、環境・資源、技術が結び合う方式を決定するのが社会諸

制度である。社会諸制度は各時代の体制原理の下で形成されるもの、すなわち上部構造としての制度と、必ずしもそれのみに規定されない制度、すなわち上部構造に属さない、あるいはそれよりも広いものとしての制度とがあるが、いずれにおいても、制度は一旦形成されると、あたかも自然的条件のように人間生活を規制する力となる。制度には法制度のように明文化されたものと、単なる慣習 (notes) や習俗 (folkways) のように明文化されていないものなどいくつかのレベルで考えられるが、いずれにおいても、それらは生産力の三つのモメントが結び合い生産活動が遂行される条件を整え、生産物の分配活動、その他もろもろの人間活動を規制するものである。したがって、社会制度も構造与件の一つである。以上四つの構造与件が、地域の生産活動、生活活動の中でどうからみ合っているかによって地域の特性が出てくる。

4

社会生活の構造与件がどのようにに関連し合い、その中から地域性が形成されてくるのか。そのことは事例的に検討されねばならない。ここでは、その一例として、ドイツ社会の特性である職人社会の伝統を考察することにしよう。

一般に、西ドイツに限らず、中部ヨーロッパ諸国においては、今日なお国民経済に占める中小企業の比重は大きくそれは歴史的な理由から手工業という刻印を押されている。ドイツ語圏の Handwerk に相当する言葉として、スカンジナビア諸国では hantverk (スウェーデン)・handværk (デンマーク)・handverk (ノルウェー) が用いられ、ラテン系諸国では artisanat (フランス)・artigianato (イタリア)・artezanato (ポルトガル)・artisanado (スペイン) が用いられている。これらの用語の意味内容は必ずしも同一のものではないが、ヘルシンキからローマに至るまで、多くのヨーロッパ人が感覚的に共通理解しうる意味内容がこれらの用語にこめられていると理解しうる〔ここでの叙述は、清成忠男稿「ドイツにおける手工業概念について」〔「経済志林」37(2)に負っている〕。手工業は、こ

れら諸国において、工場制をとる工業 (Industry) と並んで独自の産業部門として国民経済の分業構造に組みこまれているけれども、手工業と工業の差異は明確なものではなく、相互の移行は流動的であり、また両部門とも絶えず内的な構造変化をとげている。⁽⁸⁾ 今日的手工工業は、ビュッヒャーの概念によるような旧来型の手工業ではなく、工業化過程に適応し、現代資本主義経済の一役を担う産業部門なのである。その今日的形態は多様であるが、一例をあげるならば、機械化による効率的な大量一貫生産工程の中に家内工業 (手工業) が組み込まれる形のものがあるが、これは安く、大量にという要請には機械化が答え、品質の良さは手仕事を受持つという仕組みである。⁽¹⁰⁾ ここには労働手段における機械と手道具との共存がみられる。労働・生産・経済様式の多様性に加えて、手工業と他の経済部門との結合も特徴的である。例えば、松田智雄氏の研究によれば、バーデン・ウエルテンベルク地帯では、一九世紀中期に「営業の自由」が確立されるが、これに先立つ一九世紀前半期にはすでに、農工業のもつれ合い (Verflechtung) が全地帯を被うて形成されており、一九世紀後半期には、農業経営の集中と拡大はできる限り阻止され、小農的農業地帯には多種多様な加工工業が展開して、今日もなお農業と手工業とが極度の密接さでもつれ合っているのである。ドイツ連邦全体として手工業、農業の結合は一四%であり、バーデン・ウエルテンベルクでは二〇%に達している。⁽¹¹⁾

さて、このように強固な手工業が、何故ドイツその他の中部ヨーロッパ地帯に存続しえたのであろうか。それは、これら諸国が後発的資本主義国であり、農村手工業の自立的発展の余地を残した形で近代化が進行したことに帰因するのであろう。さらには、局地的市場圏の存続があげられよう。

ここで、社会生活の構造分析との関連で、地域性を考えるための予備的考察を行なっておきたい。ドイツにおける手工業が中世的伝統を引きつぎ、様々な政治的社会的な変化により歴史的変貌をとげ、今日まできたが、そのような経済活動を維持してきた要因として、制度的保障やそれを与えてきた職人的ニートスはさることながら手工業製品の

価値（使用価値）を認め、生産を与えてきた地域の顧客の存在が重要であると考え⁽¹²⁾る。国その他の公的機関による法的保障は、社会的に承認され、慣習化されている事実の追認である。ちなみに、一九二九年には手工業名簿への登録制度、一九三五年にはナチス政権下において大資格証明制度、第二次大戦後の一九三五年には手工業秩序法の制定という経過をたどり、国家の介入により手工業の組織化が進行する。前世紀以来手工業者が要求していた大資格制度は親方へのみ開業資格と徒弟養成権限を与えるという制度であり、それが手工業秩序法によって集大成されたのである⁽¹³⁾。十三世紀にさかのぼるツンフト制度の伝統は、一つには今日のマイスター制度として生きつづけている。今日西ドイツで公けに認められているのは、工業マイスターと手工業マイスターの二つである。手工業マイスターは手工業秩序法によって手工業の独立営業の資格者として規定されており、工業マイスターは依然として営業条例の中で、工場制企業に雇用されて働く有資格者として規定されている⁽¹⁴⁾。マイスター制度は、高度の技術修得を維持し、職人の地位を保障するものである。さらに、ツンフトや兄弟団にみられた同職者の相互扶助や一体感も、これらの地域の人々の社会的性格や人格的資質の形成に役立ってきたのであった。手工業者の生活感情やエートスは、独特の慣習や制度、法体系を生みだし、また、これらの慣習、制度、法律が職人的エートスを育んでいったのである⁽¹⁵⁾。地域性とは、人口、資源、技術など生産力の構造と件に規定されて形成される生産・生活の物質的基体が、歴史的過程の社会的諸関係の中で生みだされる制度的条件によって整えられ、機能することにより特定地域において形成される生産・生活の構造によって表出してくるものであると言えよう。

(1) 特定の社会制度の下で遂行される生産その他の人間諸活動が、自然のメカニズムを通して生活の破壊をもたらすメカニズムについては、例えばつぎの各書が参考になる。

- ・カーター・デール「土と文明」家の光協会
- ・ニックホルム「失われゆく大地」蒼樹社
- ・ジョズエ・デ・カストロ「飢えの地理学」理論社

さらに、最近の事例としては五十四年七月の滋賀県における琵琶湖の富栄養化と洗剤追放の運動がある。

(2) 白砂剛二「一金総から三金總へ」(ジュリスト増刊総合特集No.11 一九七八年「国土計画と生活圏構想」)

(3) 地域間の経済格差、文化的格差が何故生ずるかという問題については、第三世界の経済分析から出されたA・G・フランクの中核・衛星分極化(Metropolis-Satellite Polarization)命題や、それをさらに発展深化させたS・アミンの理論に多く学ばねばならない。アミンは、まず、分析領域として世界資本主義を前提とし、その開発部分を中心構成体、低開発部分を周辺構成体と名づける。後者から前者への価値の移転が世界的規模における資本蓄積の本質であると考え、この価値移転は原蓄メカニズムによるものであるとし、不等価交換論を展開するのである。こうした国際間の関係構造が、国内の中核部(大都市圏)と周辺部(地方都市町村)との関係にもみることができよう。

(4) 例えば、長野県の県経済連は、野菜の市場動向をコンピュータにより把握し、これによって野菜づくり農家の年間計画をたてるよう指令を出しコントロールしている。これは、工業における科学的管理法を思わせる集中管理システムの完備である。野菜の集荷の九割は農協で行い、そのうちの九割七分が経済連に集約され、分荷されているという。(「週刊朝日」一九七九年12-21号「立花隆の生態ルポ農協巨大な挑戦12」)

(5) 玉城哲、旗手勲氏は「風土」(平凡社)の中で、わが国の稲作農業における治水と灌漑の歴史を後づける作業を通じて、風土についての明解な定義を与えている。

「人間の労働と、労働の発展を意味する蓄積が、対象としての自然を特殊化し、独自化し、かつこの特殊な自然が地域の人間生活全体を特殊化する要因として反作用する場合、この諸関係を風土と呼ぶことができる。そこで風土とは、継続的な人間の自然への働きかけによって特殊化した自然であると同時に、この特殊化した自然を自己の内部にとりこんだ人間たちの資質、社会関係、文化など人間の地域生活の総体でもある。」

(6) この点、有斐閣の「生活構造論」は、自然と人間の物質代謝を基盤にわれわれの生活が構成されていることを無視している。それのみか、破壊され、非自律化された都市や農村の生活現実を見ようとし、ない目明き盲の議論である。生活構造論は生活現実の根本的問い直しをもとに構築していかねばならない。

(7) 三枝博音「技術の哲学」一二六頁

(8) 清成忠男「ドイツにおける手工業概念」(「経済志林」37-2) 九四頁

(9) カール・ビュヒャー「国民経済の成立」(栗田書店)

- (10) NHK取材班（遠藤利男、川村尚敬、吉野兼司）の「職人の世界」（日本放送出版協会）には、世界各国の職人像が興味深く報告されている。ドイツのゾーリンゲンの刃物は、大工場による一貫生産ではなく、生産工程の中に職人の手仕事が含まれている。例えば、鉄の工程には、①棒鉄を三角形に切る②炉で鉄の形に裁断する③圧力機で形を整える④鉄に穴をあける⑤鍛造する⑥刃をつける⑦刃の仕上げをする⑧メッキをする⑨二本の刃を合わせて完成する。この九工程のうち④⑤⑥は職人の手仕事で、他の工程は大工場の機械による生産である。
- (11) 松田智雄「いわゆる「工業化」の歴史的過程について」『思想』四七三号、一九六三年
- (12) “由来伝統は自ら守るだけで維持できるものではない。これを他から支持する条件がなければならぬ。釣針においては使用者がこれを支持したのである”（宮本常一著作集）二十二卷（未来社）二二七頁
- (13) 清成忠男前掲論文一一四頁
- (14) 高木健次郎「ドイツの職人」中央公論社一五九頁
- (15) 同書一二九～一三二頁

（なかに しげあつ、本学助教授）